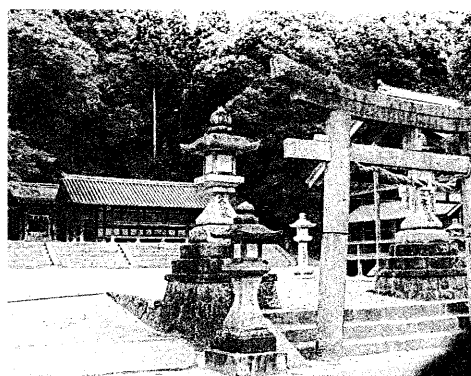


往馬大社の火祭り

文・写真 鹿谷 勲



往馬大社社頭

往馬大社

近鉄生駒線の一分駅を降りると、西に生駒山（六四二メートル）の雄大な姿がある。この辺りから眺める生駒山は、実に遅く、見るものに迫ってくる。その麓に往馬大社（往馬坐伊古麻都比古神社）の杜が精気に満ちた力強さを周囲に放って横たわっている。広い境内に足を踏み入れると、両側の座小屋や正面の高座（御旅所）が目に入る。これら祭りに使われる建物の奥、傾斜の急な石段を、途中楼門を経て登りきると、松皮葺き春日造りの社殿七棟がずらりと並んでいる。

往馬大社は生駒谷十七郷の氏神で、創祀は古く、奈良時代の正倉院文書に既に登場する。『延喜式』神名帳には「往馬坐伊古麻都比古神社二座」として大社として扱われている。イコマツヒコとイコマツヒメ（生駒の彦と姫）という男女一対の神がもともこの祭神であった。その後、鎌倉時代には神功皇后を中心とした八幡信仰へと信

仰対象を拡大させ、生駒八幡宮となる。江戸時代には、先の男女一対の神はまったく姿を隠し、牛頭天王と八王子になるが、明治以降、この二神が再び見いだされ、今日のように中央に遷された。

火燵木神

この男女一対の神は、「火燵木神」と呼ばれていた。今ではマツチすらも使わずに、ボタン一つで火は得られるが、もとは木と木を擦りあわせていた。生駒の神はこの「火を燵りだす木の神」であった。大嘗祭（天皇即位礼の際に初めて新穀を神々に献じる儀式）のために悠紀・主基二国を決めるときに、亀の甲羅を焼いて占うが、その時の火燵木は生駒社から献上されたものが使われる習わしであった。この火燵木は波波迦といい、今日の上溝桜にあたるという。

荒々しい秋祭り

こうした故実からくると思われるのが、毎年体育の日の前日（もと十月十一日、さらに以前は旧暦八月十一日）に行われる独特の秋祭りである。神前から（火を取り出す）ことがこの祭りの最大の特徴である。一般に「火祭り」と呼ばれているが、かつては宮座が主体であったので「座祭り」、魚市が立つて盛んにナマブシが料理されたので「フシ祭り」、すべてが競争でなり立っているのが「勝負祭り」、また喧嘩が絶えなかったのが「喧嘩祭り」といういろいろな側面からこの祭りは呼び習わされてきた。「生駒の神さんは血見やなおさまらん」「生駒祭りは血祭り」と言われ、かつては相当荒々しい祭りであったようだ。

宮座は廃止されたが、座祭りの影響は今

ペンズリに先導される神輿



火松明と火出し役



大松明にゴゴウシを突き刺す



火取りの瞬間



も色濃い。祭り全体を差配するのが、生駒谷を上下（現在は南北と改称）に分けてそれぞれ四人ずつのペンズリ（弁随）という役である。ペンズリは神職よりも強い権限を持ち、機嫌を損ねると祭りにはできないという。また燃えさかる麻殻の松明を担いで石段を駆け下りる火取り役はこの神事の花形で、介添役のワキビ（脇火）と二人一組で、合計四人が勤める。

本祭り

本祭り当日午後三時ごろから神輿渡御がある。青竹を手にした袴姿の警固を先頭に、楽人・神旗・高張提灯・猿田彦・稚児・鉦・獅子・大幣・火松明・火取り・ベ

ンズリ・神輿などが拝殿前から境内の山を下って石鳥居から入ってくる。広場には早くから大勢の観客が詰めかけている。南北には高張提灯がずらりと並び、中央には三メートルほどの大幣が八本並ぶ。やがて神輿はペンズリに先導されて勢いよく担ぎ込まれ、そのまま一気に高座の中に納められる。今は神輿が着御するとすぐに上下の若者たちによる御供上げが始まる。上下の御供所から各種の神饌が手送りで供えられ、その早さを競う。終わると今度は広場に並んだ大御幣を宮司が順に振る。神職が三本目の御幣に触れたとたん、大太鼓が打たれ、これを合図に大松明を広場に引き出し、地面に立てる。その上に若者がよじ登ってゴゴウシ（御串）を突き刺す。膨らんだススキを突き刺すので、これをオハナを立てるといい、早く四本立てた方が勝ちとなる。このあと巫女神樂があり、さらにペンズリの舞が行われる。悠々と演じられるペンズリの所作に「よーアゼ踏んどいてや」などと周囲からいろいろと声が掛けられ、ひとしきり賑わう。

火取り

ペンズリの舞が終わると、いよいよ最大の呼び物の火取りとなる。こうした一連の行事の間に人々の期待感は次第に高まっていく。ゴゴウシが再び現れ、上下に分かれて境内東側に待機する。火取りは高座のすぐ下で真剣な面もちで控えている。高座の奥で炎がゆらめき始める。高座の奥の火出し役は、二つの松明に十分火を燃え移らせてから、「よし、よし、よし、よし」と火取りに声を掛ける。三度めの掛け声で燃え盛る松明を手渡すと同時に、火取りは松

明を肩に担いで全速力で石段を駆け降りる。速く石段を降りた方が勝ちで、ペンズリが弓を倒して判定する。火取りはそのまま境内を駆け抜けて、ゴゴウシのそばを通り抜ける。その瞬間、火はススキに燃え移って大きく炎が舞い上がる。これらは一瞬の出来事で、それまで固唾をのんで成り行きを見守っていた観衆から大きなどよめきがある。そのあと人々は帰途をめぐして一斉に散らばり、神輿は還御を始める。

神の火から人の火へ

徐々に期待感が高まり、そして一気に終わるこの祭りを、かつてある新聞は「十秒間の祭り」と表現した。言い得て妙だ。しかし、このあまりにもユニークすぎて他に礼を見ない火取りの行事は、いったい何を意味しているのか考えてしまう。

擦る杵とそれを受ける臼から火は生まれる。火を熾りだす男女一対の木の神とは、火燧杵と火燧臼のことなのであろう。神前でようやく与えられた火は一刻も早く取り出して守らねばならない。火が神から与えられたとする神話はいくつもある。ギリシヤでは、プロメテウスが神の元から火を盗み出して人間に与えたために永劫の罰を受けた。生駒の火祭りのなかにも、わが国における神から人へ火がもたらされた物語の片鱗が伝えられてきたように思えてならない。